

歴史研究とオーラルヒストリー

伊藤 隆

- 1 私にとっての「オーラルヒストリー」
 - 2 「オーラルヒストリー」の歴史
 - 3 私が行き、また参加したオーラルヒストリー
 - 4 史料としてのオーラルヒストリー
- 最後に

1 私にとっての「オーラルヒストリー」

私は今から30年前の昭和52年に編纂し東京大学出版会から刊行した『近代日本研究入門』に「聴き取りについて」という一文を書いた。今読み直しても余り大きな変更をしなければならぬところがない。それをベースにその後の進展を記す事にする。当時は「オーラルヒストリー」という言葉は全く使われておらず、「聞き取り」「インタビュー」「談話聴取」「ヒアリング」等々がほぼ同じような意味で使われていた。

前述の一文の冒頭に私は次のように書いた。

研究の対象が、直接それに関係した人びとが今日なお生存している可能性のある位近い時代のことである場合、聴き取りは研究にとって、後述のような制約を充分に念頭においた上で、極めて重要な情報源である。

第一に、直接に質問をし回答してもらえということであり、回答に対して再質問をして回答してもらい可能性もあり、これは文献史料が一方的であるのと違って聴き取りの最大の利点である。第二に、文献史料について当事者からその背景や解釈を聴く事が出来るだけでなく、現在われわれが利用しうる文献に書かれていない多くの事実を聴く可能性があるということである。それだけではなく、元来文献史料に記載されぬ事柄——書き手にとっても受け手にとっても当然所与となっている事柄で、しかも現在のわれわれにとって必ずしも所与ではない事柄——や、事柄の背景にある人間関係（それはしばしばその事柄を理解する重要な要素となっている）などを聴くことが可能である。そして第三に、それを通じて文献史料を提供してもらおうキッカケが生ずる可能性も持っていることである。

私自身が聴き取りを始めたのには、次のような事情があった。私は昭和36年に東京大学社会科学

研究所の助手に採用されたのをきっかけに、それまでの明治史研究から昭和史研究にテーマを変えた。ところが実際に取りかかってみると、『西園寺公と政局』他の公刊された史料が若干あったが、国立国会図書館憲政資料室にも昭和期の史料は少なく、防衛庁の戦史部も史料を公開しておらず、外交史料館も国立公文書館もまだないという状況であった。それなら自分で関係者の遺族から文献史料を提供して貰う、関係の生存者にはお話を伺おうと考え、実践した。その当時だと昭和初期に活躍したトップの人物は既に生存していなかったが、その周辺の方々は生存されており、お願いに応じて貰うことができた。

それ以前にインタビューの経験がなかったわけではない。この前後から参加させて貰っていた木戸日記研究会、内政史研究会でインタビューアーの端くれに加えて貰っていたし、林茂・安藤良雄両教授が中心になっていた「日本終戦史」の『週刊読賣』への連載に参加し分担執筆を行い、その際に担当者の塩田丸男記者の手ほどきで、インタビューを試みた経験を持っていた。以後機会を求めて数多くのオーラルヒストリーを行ってきた。但し私は文献第一という立場なので、直接引用は極めて少なく、前述の三つの効用を期待して、活用してきた。

私にとって、現在は「オーラルヒストリー」と呼ばれる活動は、「日本近現代史の研究テーマのためにその問題の関係者に質問して答えていただくということ、それから、より広い範囲で日本の政治や行政、その他国内の組織や運動で重要な役割を果たした人物から、その人物の生涯を通じての経験について質問して答えていただく」というものである。

こうした聴き取りは、相手の承諾を得て、テープに録音され、更には文字に書き起こされることが必要で（録音の手段がなかった時期には後述のように同席した速記者による記録が残される事が必要であった）、そうでなければ、データとして後世に残る、第三者の研究にも活用されることはないし、自分が研究に活用したとしても、根拠として薄弱なものとならざるを得ない。

自らのインタビューの記録だけでなく、既に亡くなられた人びとに対して聞き手によって過去行われたオーラルヒストリー記録も歴史研究の重要な史料である。これらは貴重な史料として活用している。

2 「オーラルヒストリー」の歴史

記憶を文字にといえ古事記を思い起こすが、既にその前に記録があったようである。その記録がどのようなものであったか、不明だが、いずれにしても漢字を用いて日本語を表記したものであったろう。漢字を日本語を表現する文字として工夫したのが誰であったかは不明だが、これは極めて大きな出来事であった。この前後の時期から歴史時代ということになる。それ以前は考古学の世界であり、遺物、遺跡などを通じて、かすかに当時の人々の生活を伺うしかない世界である。

日本ではどの程度の人々が読み書きをすることが出来たか不明だが、律令時代から文書行政が行われていたことは確かである。ある程度上層の人々が読み書きが出来たであろう。村落のレベルまで識字率が高まったのは、徳川中期以降と思われる。残されているこの時期以降の農村文書の量は並大抵のものではない。幕府はじめ、諸藩でも大量の行政文書が残されている。幕末段階で識字率が30%程度であったと推計されている。これは当時の世界でトップクラスである。明治維新以降の

初等教育の普及で、明治末年には識字率は90%を遙かに越えた。従って行政文書でも個人文書でも大量のものが作られ、震災等の災害や戦災にも関わらず、大量の文書史料が残されたのである。

それにも関わらず明治後半期に入って、当事者からの聞き取りが行われるようになったのは、表面に残された文書では判らぬことが少なくないという認識があったからであろう。また今日に近い形で、行われるようになったのには、日本語の速記術が開発されたという背景を考えなければならぬ。明治14年に田鎖綱紀という人物が日本語の速記術を発表して、それが普及していった、そして明治29年の第九帝国議会で、彼に年金を与えよという建議が出され、可決されて、彼は生涯年金300円をうけることになった（福岡隆『日本速記事始：田鎖綱紀の生涯』岩波書店、昭和53年）。彼のおかげで帝国議会は最初から本会議の議事速記録が作られたのである。

明治20年代に宮内省から、開国前後から維新の事績、事柄をまとめて編纂し、上呈せよという命令が、島津、毛利、山内、徳川の諸家にあった。これらの諸家には歴史編纂の機関が存在していたので、その関係者が集まって「史談会」を組織して聴き取りを始めた。開国から30年を経て、混乱ということもあったであろうが、その間の歴史が文字記録だけでは不分明になっていたのである。この「史談会」という言葉は比較的最近まで一般的に生きていたし、現在でもある世界で生きている言葉である。会合を開いて、当時の生き残りの関係者から談話聴取を行い、質疑応答をする、その速記録を『史談会速記録』という雑誌に掲載し、この雑誌は昭和7年まで続いたのである（『史談会速記録』は昭和47～50年にかけて原書房から復刻された）。この会がひとつの母体になって、明治44年文部省に維新史料編纂会が組織され、これが政府の公定ともいべき『維新史』を刊行するという事になった（昭和14～16年に5巻と付録1巻が刊行された）。この編纂の過程でも聴き取りが行われ、その記録が現在は東京大学史料編纂所に残されている。

この後『明治天皇紀』編纂のために宮内省に臨時帝室編修局が設けられた（大正3年、当初は臨時編修局）時にもオーラルヒストリーが行われた。現在宮内庁書陵部が所蔵する臨帝本と呼ばれる、その時に収集された膨大な史料の中に談話速記録が残されている。このように人物や組織の歴史の編纂に当たって、オーラルヒストリーが行われることは少なくなかった。しかしそれは編纂のためのデータであって、その組織の外に出される、その編さん以外に利用されることは稀であった。一般的に文字史料についても同様であったが、特にオーラルヒストリーについてはそういう傾向が強くなり、非公開になったり、散逸しそうになったりということがあった。それらを公にする、少なくとも過去どういうオーラルヒストリーが行われてきたのかをきちんと把握することも我々の重要な仕事と認識している。

既に大蔵省が『昭和財政史—終戦から講和まで—』の編纂に当たって昭和26年から31年まで、大臣以下、関係各省・民間の関係者を含む88名から106回に亘って行われ、纏められた「戦後財政史口述資料」は内部資料であるが、大学等に所蔵されるものがあり、その内容目録を私が代表者となっている近代日本史料研究会から『大蔵省官房調査部・金融財政事情研究会編「戦後財政史口述資料 全8冊」目録』として刊行した（平成18年）。それ以前戦前戦時の財政史編纂に当たっても150回以上のヒアリングが行われ、「昭和財政史史談会記録」が纏められ、すべてではないであろうが、『大蔵大臣回顧録』（大蔵省大臣官房調査企画課編、大蔵財務協会、昭和52年、『大蔵大臣の思い出』という題のものもある）、『戦時財政金融史』（同、昭和53年、『聞書戦時財政金融史』という題のもの

のもある),『戦時税制回顧録』(同,昭和53年),『外地財政金融史』(同,昭和54年),『続外地財政金融史』(同,昭和55年)として公刊されている。大蔵省(その後財務省)はその後の「大蔵省財政史」の編纂にあたってインタビューが続けられていることを確認できる。同じように商工省・通商産業省においても『通商産業政策史』の編纂の過程で、ヒアリングが行われ、「産業政策史回想録」として纏められているが、昭和49年から59年に行われたものの目録を上記同様『(財)通称産業調査会編「産業政策史回想録 全43巻」目録』として刊行した(平成18年)。詳しくは村井哲也氏による「紹介」を参照されたい。ただこれ以前に『商工行政史談会速記録』第一分冊,第二分冊が昭和50年に産業政策史研究所で纏められている。これら大蔵省・商工省・通商産業省における編纂事業に伴うインタビューは戦前からの伝統と思われる。その他の各省庁でも,あるいは企業においても年史編纂に当たってインタビューが行われ,記録が作られた事が多かったのではないかとと思われるが,それ自体が刊行されることは前述の大蔵省のもの以外には殆どなかった。

速記者が出現したことによって,様々な人物が自ら,或いは他から勧められて自己の過去を語り,それを出版するという行われた。勝海舟の『氷川清話』(明治30~31年),福沢諭吉の『福翁自伝』(明治32年),徳川慶喜の『昔夢会筆記』(明治40年から大正2年まで行われ,大正4年に25部が印刷され,戦後「東洋文庫」の一冊として公刊された),高田早苗の『半峰昔ばなし』(昭和2年),渋沢栄一の『青淵回顧録』(昭和2年)などが代表的なものである。「大正初期山県有朋談話筆記」もこうしたものの一つであろう(「二上兵治関係文書」中にあり,筆者が昭和56年に山川出版社から翻刻した)。これらはモノログではなく,聞き手がいたに違いないが,聞き手の役割,質問が記録されることはほとんどなかった。これらはそういう点でオーラルヒストリーとはいえないが,その周辺のものであるといえよう。昭和31年に始まり現在も続いている日経の「私の履歴書」も多くはこのたぐいである(政策研究院政策情報プロジェクト『政策とオーラルヒストリー』中央公論社,平成10年,阿部良氏の報告参照)。

昭和期に入って,昭和12年に帝国憲法定50周年の記念事業の一つとして衆議院に憲政史編纂会が設置され(貴族院にも貴族院50年史編纂会が設置された),史料の収集が行われたが,同時にオーラルヒストリーも行われた。臨時帝室編修局の編修官をしていた渡辺幾治郎氏が中心になって行われているが,その前からの経験が生かされたものであろう。これは広瀬順昭監修・編集『政治談話録・憲政史編纂会旧蔵』第1~10(ゆまに書房,平成10・11年)に収録されている。戦後になってからであるが早稲田の社会科学研究所の所長であった吉村正氏が中心になって政治家のオーラルヒストリーを行っているが,その中にも渡辺幾治郎氏が加わっている。オーラルヒストリーの歴史の中で渡辺氏は逸することのできない人物である。

戦後もかなり多くのオーラルヒストリーが行われた。占領下の東京裁判の対策のために組織された内外法制研究会という組織があり(多分外務省と関係があったのではないと思われるが定かでない),戦前期のことについて,多くの軍人,外交官,政治家,官僚などからオーラルヒストリーを行い,記録を謄写印刷にして関係者に配布した。当時の粗悪な紙に謄写印刷されたものであるために,現在では非常に読みにくくなっており,かつそれを全部そろえて所蔵しているところがない。

また,GHQが戦史編纂のために歴史課を作り,そこで戦中期の重要な日本人に対するオーラル

ヒストリーを行った。このオーラルヒストリーを直接担当したのは日本人で、日本語で行った。その英文をGHQに渡しているが、最近日本語のものが公刊された（佐藤元英・黒沢文貴編『GHQ歴史課陳述録』上・下〈平成14年、原書房〉）。

当時のジャーナリズムもオーラルヒストリーに関心を持つようになった。昭和30年代に入って、毎日新聞社の『エコノミスト』誌に安藤良雄東大教授による「昭和経済史への証言」と題するオーラルヒストリーの記録（多少編集されたようであるが）が連載され、やがて同名の三冊の本として出版された（昭和40～41年、毎日新聞社）。この企画は、エコノミスト編集部によって、次々と別のバージョンが作られ、『昭和思想史への証言』（昭和43年、毎日新聞社、のち改訂新版が昭和47年に刊行された）、『戦後産業史への証言』1～5（エコノミスト編集部編、昭和52～54年、毎日新聞社）、『高度成長期への証言』上・下（エコノミスト編集部編、平成11年、日本経済評論社）として公刊された。

ジャーナリスト自身によるオーラルヒストリーをもとにした作品が、読売新聞社の『昭和史の天皇』1～30（昭和42～51年、読売新聞社）である（この企画については、前掲の『政策とオーラルヒストリー』の中の谷崎龍一氏の報告、近代日本史料研究会での松崎昭一氏の三回に亘る報告〈科研費報告書『近現代日本の政策史料収集と情報公開調査を踏まえた政策史研究の再構築』平成17年〉、参照）。これは松崎昭一氏が中心になったチームでオーラルヒストリーを行い、昭和史のいくつかのテーマ、終戦への動き、原爆投下、ソ連参戦、インパール作戦、国家総動員法と物動、企画院事件、ナチスとの接近、ノモンハン事件、日米交渉他と必ずしも系統的ではないが、関係者の徹底的なインタビューを中心に据えて叙述した作品である。昭和42年1月1日から『読売新聞』に「昭和史の天皇」という題で連載され、以後8年9ヶ月で2795回に及んだ。昭和44年10月30日に100回の連載が終わったところで、この前年のアメリカオーラルヒストリー学会に参加した角田順氏が、コロンビア大学のオーラルヒストリー・リサーチオフィスのディレクターであったアラン・ネヴィンズ氏の業績を紹介しながら、「昭和史の天皇」をオーラルヒストリーの素晴らしい成果として評価している。おそらくこれがジャーナリズムで、オーラルヒストリーという言葉を用いて紹介が行われた最初ではないかと思われる。

ちなみにこの時に用いられたテープがどうなっているのかを私は大変興味を持ち、読売新聞社の知人を通じて社内を調べてもらった。かなり各方面を探索の結果、相当な量のテープ等が残存していることが明らかになった。それを大切に保存してくれていた某氏が退職に当たって、このまま社内に置いてはどうなるか判らぬからといって私に預けた。その数年後私は読売新聞社と連絡を取ったら、法務部という組織が出来ていたので、交渉し、著作権が読売新聞社にあることを確認した上で、それを政策研究大学院大学に寄託して貰うことにした。更に中心になってプロジェクトを推進した松崎昭一氏とも連絡を取り、同氏が大切に保存してくれていた大量のテープをお預かりして、先のもと同様な手続を読売新聞社で行った。その際に「昭和史の天皇」プロジェクトが打ち切られた後、戦後班が作られ、やはり新聞に連載の後三冊の本（『日章丸事件』〈読売新聞社、昭和55年〉、『再軍備の軌跡』〈読売新聞社、昭和55年〉、『昭和戦後史 教育のあゆみ』〈読売新聞社、昭和57年〉）に纏められたことを知り、その最後のものに関わった乳井昌史氏にアプローチして、そのテープを含む取材関係の史料をお預かりした。武田知己氏が中心になって整理し、平成18年に『読売新聞社

「昭和史の天皇」取材資料目録』『読売新聞戦後史班「昭和戦後史・教育のあゆみ」取材資料目録』として近代日本史料研究会から刊行した。その間これらは国会図書館憲政資料室に寄贈されることになった。これらは読売新聞社と聞き手木戸幸一氏以下多数の人々に著作権があり、その処理及び公開は今後の課題となっている。

労働運動の分野では、高梨昌氏を中心としたグループによるオーラルヒストリーがあり、『証言戦後労働組合運動史』（東洋経済新報社、昭和60年）はその成果の一つである。なおこのグループの活動については、梅崎修「戦後労働組合運動の証言研究会の歴史—高梨昌氏に聞く—」（『オーラルヒストリー』6、平成14年）を参照されたい。

また東京大学アメリカ研究資料センター（現在のアメリカ太平洋地域研究センター）の「日本のアメリカ研究オーラルヒストリーシリーズ」31冊、日米10人の第二次大戦オーラルヒストリーシリーズは貴重なものであり、1970年代にオーラルヒストリーという言葉を用いているのは、アメリカにおけるオーラルヒストリー協会の活動の影響だと想像される。

後述の政策研究大学院大学のオーラルヒストリー・プロジェクトとも連絡のある日本河川協会（「河川オーラルヒストリー」として、渡邊隆二、尾之内由紀夫、西川喬、小坂忠、青木義雄、松村賢吉、堀和夫、中澤弍仁の諸氏のオーラルヒストリーを冊子として公刊している）や土木協会、防衛庁防衛研究所（中村悌次・佐久間一の両氏のオーラルヒストリーを公刊している）もオーラルヒストリーを続けている。今後更にこの試みは広がっていくことと思われる。

なお、個人でオーラルヒストリーを行い、それを活用して研究を進めている人も少なくないであろう。

3 私がいき、また参加したオーラルヒストリー

私自身がオーラルヒストリーに関わったのは前述のように昭和30年代からである。その一つは、内政史研究会（辻清明東大教授が中心）によるもので、昭和38年に主として内務省関係者のオーラルヒストリーを行うことを目的にして組織されたものである。私は昭和40年から参加した。この会は昭和53年までの16年間継続し、66人から269回のオーラルヒストリーを行い（一回2～3時間）、そのうち231回分のものをタイプ印刷して関係者に配布し、残りは主として経済的な理由から印刷できず、速記録のままになった。これらは現在国会図書館憲政資料室で閲覧することができる。オーラルヒストリーの対象者は、最初内務省地方局の幹部、次第に警保局関係者、その取り締まりの対象となった左右の運動家、さらに他の省庁の幹部と広がっていった（拙稿「内政史研究会の解散」〈『日本歴史』平成7年1月号、後『近代日本の人物と史料』[平成12年、青史出版]に収録〉参照）。

岡義武東大教授を中心とする木戸日記研究会に参加したのもほぼ同じ頃であった。この会で『木戸幸一日記』上・下・『木戸幸一関係文書』（昭和41年、東京大学出版会、ちなみに昭和55年に刊行した『木戸幸一日記・東京裁判期』には、前述のGHQ歴史課の記録とともに、アメリカ戦略爆撃調査班による聞き取りも収録した。この戦略爆撃調査班の膨大な聞き取りも一種のオーラルヒストリーである）の編纂刊行の仕事に関係し、並行してオーラルヒストリーを始めた。ここでは主と

して旧帝国陸海軍の将軍，提督からオーラルヒストリーを行った。この会も多くの談話速記録をタイプ印刷で刊行したが，刊行できなかつたものもある。内政史研究会と同様に，経済的な困難と働き手が多忙になり，引き継ぐ若手が育たなかつたことから解散に至った（拙稿「木戸日記研究会の解散」『日本歴史』平成5年1月号）参照。またこの研究会と関係深く，やはりオーラルヒストリーを行っていた日本近代史料研究会については拙稿「日本近代史料研究会の解散」『日本歴史』平成8年5月号，のち前掲『近代日本の人物と史料』に収録）を参照されたい。

私個人としても，研究のために一回ないし二回の短いオーラルヒストリーを昭和30年代から始めた（行ったインタビューのテープ及び書き起こしは国会図書館憲政資料室に寄贈した）。それから長期にそれを行っているうちに，オーラルヒストリー自体に強い興味を持つようになり，一人でも多くの人々からオーラルヒストリーを行い，後世に記録として残しておきたいという希望を強く持つようになった。

前述のジャーナリズムのオーラルヒストリーへの関心の中で，私も中村隆英・原朗両氏と昭和45年に「現代史を創る人びと」という企画に参加し，政治家，官僚，学者，経営者など20人の方々から一人につき3回から8回にわたってオーラルヒストリーを行った。多少編集して，『エコノミスト』に連載し，やがてこれも4冊の同名の本として出版された（昭和46～47年，毎日新聞社）。

『中央公論・歴史と人物』『中央公論』もオーラルヒストリー記録掲載の場の一つであった。私の関わったものとしては，昭和54年に連載を始めた「岸信介元首相連続インタビュー」は，昭和61年に『岸信介の回想』という題で文藝春秋から刊行された（矢次一夫氏と）。また特高警察官として著名であった宮下弘氏のオーラルヒストリーを中村智子氏と協力して行い，昭和53年に『特高の回想』として田畑書店から出版された。

また年史編纂と関連して行ったものもある。昭和47年に始まった戦後茨城県議会史編纂（責任者は辻清明教授）に参加して，インタビューをすることを主張して容れられ，その年から昭和52年までの間に38回のオーラルヒストリーを行った。現元の県会議員，県選出の国会議員，元知事，現元の行政官などが対象者であった。この記録は内部資料として関係者に配布されたが，一般には公表されなかつた。この時に，別に，議会史の担当者であった森田美比氏と県内の左右の社会運動家のオーラルヒストリーを行った。これも数十人を対象にした。これを基にして，茨城県の社会運動史をまとめなければならないのだが，私が他の仕事に追われて，未だ実現していない。

昭和50年に始まった東京大学百年史編纂でも10人前後のオーラルヒストリーを行って，その一部が『東京大学史紀要』に連載されている。この編纂事業の中で，三上参次「談旧録」というものが提供された。三上は『明治天皇紀』編纂にも関係した歴史家である。この三上教授の弟子たちが三上の回顧を聞く会を組織して，昭和11年から4年間にわたって19回のオーラルヒストリーを行った，その速記録であった。百年史編纂委員長であった土田直鎮教授が，当時編集長をしていた『日本歴史』に昭和55年から三年間にわたって連載し（これは纏めて『明治時代の歴史学会・三上参次懐旧録』として平成3年に吉川弘文館から刊行された），これをきっかけに『日本歴史』は今日まで学会の長老のオーラルヒストリーを行い，連載を続けており，いくつかには私も関わってきた。

内政史研究会の場合も資金的に科学研究費に依存していたが，1970年代から80年代にかけて衛藤藩吉教授を代表者とした「文化摩擦」の大型科研費に私も参加させて頂いたが，ここでもかなりの

数のオーラルヒストリーが行われ、私も数人のオーラルヒストリーを行った。ここではオーラルヒストリーではなく「インタビュー記録」という言葉が用いられていた。

平成4年度から6年度にかけて、渡邊昭夫氏を中心とする科研費「戦後日本形成の基礎的研究」が行われ、その中でもオーラルヒストリーが行われ（この時には「オーラルヒストリー」という言葉が用いられた）、私も政治家を中心に7人のオーラルヒストリーを行った。この科研費の終了とともに、翌年御厨貴氏（氏はその後『オーラルヒストリー・現代史のための口述記録』（中央公論新社、平成14年）を著している。これはオーラルヒストリーについて最も纏まった記述である。オーラルヒストリーの意義・方法、自身の体験を述べている）を代表者にして申請を行い、幸いに認められて、本格的にオーラルヒストリーを行った。これが平成9年の政策研究大学院大学の創設と同時に、「政策情報プロジェクト」として大学のプロジェクトになり、さらに平成12年度から文部省の中核的研究拠点形成プログラム「オーラルメソッドによる政策研究の基礎的研究」に発展して、平成16年度までの5年間、180人弱を対象に1200回、おおよそ2400時間のインタビューを行った。竹下登、宮澤喜一、海部俊樹、後藤田正晴以下の政治家、柳谷謙介、松永信雄両外務次官をはじめとする外交官、海原治、伊藤圭一、夏目晴雄、宝珠山昇他の防衛官僚、大田昌秀、吉元政矩の沖縄知事・副知事、長岡実、宮崎勇、山下英明、塩飽二郎他財政経済官僚、天城勲、木田宏他文部官僚、渡邊恒雄らジャーナリスト、天池清次、金杉秀信、宇佐美忠信、宝樹文彦、山岸章他の労働運動指導者が応じて下さり、殆どを冊子として公刊した（詳細は科研費報告書『オーラル・メソッドによる政策の基礎研究』平成17年に詳しい）。その中には竹下登『政治とは何か・竹下登回顧録』（講談社、平成13年）、奥野誠亮『派に頼らず、義を忘れず・奥野誠亮回顧録』（PHP、平成14年）、後藤田正晴『情と理・後藤田正晴回顧録』（講談社、平成10年）、渡邊恒雄『渡邊恒雄回顧録』（中央公論社、平成12年）、天池清次『労働運動の証言』（日本労働会館、平成14年）、宇佐見忠信『志に生きる』（扶桑社、平成15年）、宮崎勇『証言戦後日本経済：政策形成の現場から』（岩波書店、平成17年）などのように一般書として刊行されたものもある。

この間に木戸日記研究会・内政史研究会以来の友人の故佐藤誠三郎教授と中曽根元総理のオーラルヒストリーを行い、平成8年に『天地有情』という題で文藝春秋から刊行された。これらのオーラルヒストリーを通じて、ほぼ戦後日本の政治・外交・行政・社会他の動向が立体的に見えるようになって来たが、まだまだその網の目はかなり粗いといえる。

またこのプロジェクトで、オーラルヒストリーの法的整備を、雛形を創り、オーラルヒストリーの対象者ときちんとした法的な関係を作ったことも特記すべきことであろう。

また古い時代には、私もそうであったが、速記者に頼んで速記を作って貰ったが、テープはかなり高価なものであったので、保存しなかった（速記者もテープをとってそれに更に上書きしていた）。その後テープが安くなった時期にはテープを保存していたが、木戸日記研究会及び内政史研究会、また私自身の保存してきたテープ、最初の書き起こしや談話者による訂正原稿等は国会図書館憲政資料室に寄贈されている。

私はその後も政治家等のオーラルヒストリーを行って、それを冊子にして公開し続けている。

4 史料としてのオーラルヒストリー

冒頭に述べたように、オーラルヒストリーは貴重な歴史史料である。しかし非常に勝れたインタビュアーが記憶のはっきりした対象者から行ったオーラルヒストリーであっても、史料としては二次的である。史料を使う場合には、文書史料と同じように、或いはそれ以上に史料批判が必要な事は言うまでもない。オーラルヒストリーの場合、第一に、対象者の話はしばしば不正確である。年代の間違い、一つの事柄と似た他の事柄との混同などは避け得ない。記憶の不正確さは、自らを省みれば当然の事だが、極めて特殊な人を除けば記憶は一般的に曖昧なものであり、さらにその記憶のもとになった同一時点での共通な経験・見聞でも人によって極端に異なっていることはしばしば体験するところである。これらは他の諸史料をつき合わせて十分に検討しなければならない。だが、第二に、それよりももっと重要なのは、人間は絶えず新しい状況の下で自己の過去というものを再整理して、それによって自己の再確認をしながら生きていくということである。従って思い出された過去はしばしばその人にとっての今日的価値に強く影響されて、変形し、解釈をし直され、不都合な部分は記憶から排除されている可能性がある。特に戦前から敗戦を経て、大きく「世の中の」価値観が変化を余儀なくされた場合などにそれは強く見られる現象である。こうした人間的要素を十分に考慮して活用する必要がある。

オーラルヒストリーを活用した作品（もちろん文書史料をも活用しているが）、それ自体もオーラルヒストリーと呼ばれることがあるが、その代表的なものとして前述の『昭和史の天皇』（全30巻、読売新聞社、昭和42～51年）及び読売の戦後班の3冊の本などがあり、これらは今日でも研究として生きているものである。

また升味準之輔氏の『日本政党史論』の主として大正・昭和期の記述には、かなり大量の内政史研究会でのオーラルヒストリー記録が引用され、実に生き生きとした描写になっている。原彬久氏の『岸信介』（岩波書店、平成7年）も、自身の行った本人へのインタビューをベースにした優れた伝記研究である。ちなみにこのインタビュー録は原彬久編『岸信介証言録』として平成13年に毎日新聞社から公刊されている。この他にも数多くの研究作品がある。

最後に

以上述べたように、オーラルヒストリーは近代の歴史研究に重要な意味を持つし、これまでの蓄積も少なくない。残念ながら、上述以外にも多くのオーラルヒストリーの蓄積が在ると思われる（インターネットの検索で多くの所でこの手法が用いられ、その成果が作られているらしい事が判る）が、一つには非公開になっているものが少なくないだろうと思われる事、もう一つは、これらの蓄積、ないしそれについての情報のセンターがないことである。この仕組みを作る事は今後の最大の課題であろう。

人間の脳は、コンピュータの大量のソフトを持っているハードディスクのようなものと言ってよいであろう。歴史上各分野で重要な役割を担った人びとも死去と共に、多くの情報を記録していた

ハードディスク＝脳は完全に失われる。脳に蓄積された情報を保存する技術は多分生まれる事はないであろう。われわれは、多くの重要人物の記憶が失われる前にその中の重要な部分（全部という事はあり得ないのだから）を系統的にインタビューし、記録として後世に遺していく、そういうセンター機能を必要としているのである。

（いとう・たかし 政策研究大学院大学教授）

●敗戦直後の政治・社会運動の黎明期をリアルに描き出す、共同研究の成果

「戦後革新勢力」の源流

占領前期政治・社会運動史論 1945-1948

法政大学大原社会問題研究所／五十嵐 仁編 A5判上製・3900円（税別）

敗戦直後の食糧闘争から社会党の結成・共産党の公然化や、それとの関連で発展していく労働・農民運動。さらに、青年・学生、女性運動の展開…戦後革新運動の黎明期を史実に基づいて解きおこす。

- 序章 占領前期政治・社会運動の歴史的意義（増島 宏）
- 1章 戦後社会運動の出発—敗戦直後の食糧闘争（梅田欽治）
- 2章 戦後日本共産党の公然化・合法化（犬丸義一）
- 3章 日本社会党の結成—「戦後革新」の一つの出発（大野節子）
- 4章 戦後労働運動の出発—「10月闘争」から「2.1ゼネスト」へ（山田敬男）
- 5章 戦後農民運動の出発と分裂—日本共産党の農民組合否定方針の破綻（横関 至）
- 6章 戦後女性運動の源流—新日本婦人同盟を中心に（伊藤康子）
- 7章 学生運動の再出発とその展開—全学連結成前史（手島繁一）
- 8章 戦後沖縄革新運動の源流（南雲和夫）
- 終章 戦後革新運動への展望（五十嵐 仁）

大月書店 〒113-0033 東京都文京区本郷2-11-9／電話 03-3813-4651（代表）
<http://www.otsukishoten.co.jp/>